Haribhadra-sūri の解脱への道

——YDS にみるヨーガの階梯——

浅野玄誠

はじめに

本稿は、Yogadṛṣṭisamuccaya（『ヨーガ視点集成』以下YDS）をテキストとして論考を進める。YDS は、Haribhadrasūri[1]（以下 Har）の著わした四ヨーガ書[2]の一つであり、八種のヨーガ視点を述べる。彼はジャイナ教の学僧であるが、その知識・関心は広範に及び、彼が独自に数え挙げた六派哲学の綱要書、Ṣaḍdarśanasamuccaya（『六派哲学集成』）は有名である。

彼は、ジャイナ教の伝統教義を重んじながらも、解脱の因（mokṣa-hetu）[3]としてのヨーガの実習の必要性を強調している。その背景にはジャイナ固有の十四徳位（guṇasthāna）との相関、あるいは puruṣa や ātman の絶対性や神性を云々することをことさらに避け、mokṣa の状態に自らたどりつくことの叶った人格的最高位、すなわち絶対智者（sarvajña, kevala）の実現への確信が秘められている。

もっとも、YDS はそうした思想的希求を本体としながらも、具体的な修定法を各論的に扱った書物である。Har の述べるヨーガの八階梯とは、mitrā, tārā, balā, diprā, sthirā, kāntā, prabhā, parā であるが、それぞれがその順位にしたがって、Patañjali のヨーガ八支、Bhagavaddatta の a-dveṣa を始めとするヨーガ八階梯、おなじく Bhadanta Bhāskara の a-kheda 等の八階梯と対照されて扱われている。[4]

また、この八視点は、YDS 12〜20 に示される八視点の概要、なかんづく YDS 15 に示される喩説[5]によって、前四視点と後四視点に大別されている。

本稿では、紙幅の都合により前四視点に限り、他のヨーガ階梯との比較、特に Patañjali の八支ヨーガと対照しながら、mitrā, tārā, balā, diprā のそれぞれを各論的に考究し、その目的を探る。

1　yama（禁戒）と mitrā

不殺生・実語・不盗・不婬・充分に持たぬことが禁戒（yama）である。

ahiṃsā-satyā-'steya-brahmacaryā-'parigrahā yamāḥ　〈YS II-30〉

YS II-30 におかれる禁戒（yama）の定義である。YDS 21 はこの一文をそのままの形で自註に引用する。[6] 苦行を重視するジャイナ教にあって、不殺生を始めとする戒は厳しく守られねばならない。Tattvārthādhigamasūtra VII-1 には、

殺害・虚言・窃盗・淫行・充分に持つことより離れるのが誓戒（vrata）である。

hiṃsā-' nṛta-steyā-' brahma-parigrahebhyo virati vratam　〈TAAS VII-1〉

と述べられるが、ここに示される誓戒（vrata）と YS に説かれる禁戒（yama）とは内容的に一致している。註釈者 Vyāsa は、

不殺生とは、いかなる場合にも、いかなる時にも、すべての生物を害さないことである。他の禁戒・勧戒はこれを根元としており、これの成立を目指しているからこそ、これを教示せんがために［他の禁戒・勧戒が］教示される。[8]

として、不殺生（ahiṃsā）をすべての禁戒の中心的課題と位置づけているが、このあたりの思想や時代的要素を勘案すれば、禁戒（yama）は、ジャイナ教の戒の影響を受けているとみることができよう。

ただし Har は、mitrā の解説の冒頭、自註に YS を引用する以外、もはやこうした思想に言及することをせず、YDS 21 にみられる禁戒（yama）との対照は、広く一般に認められるヨーガの第一支に形式的に追随したにすぎない。

Har は、mitrā の目的と具体的内容を次のように設定する。

ここ［mitrā］にあるとは、誤りなき、解脱の原因たるヨーガの種子（yoga-bīja）の獲得をおこなうということであると、ヨーガの熟練者達は知る。

karoti yoga-bījānām upādānam iha sthitaḥ/ava-

ndhya-mokṣa-hetūnām iti yoga-vido viduḥ

〈YDS 22〉

ジャイナの聖者に関する正しき理解、彼への帰依（namaskāra）、そして敬礼（praṇāma）等が最上のヨーガの種子である。

jineṣu kuśalaṃ cittaṃ tan-namaskāra eva ca / praṇāmā-'di ca saṃśuddhaṃ yoga-bījam anuttamam

〈YDS 23〉

Har はここで、mitrā の目的を「ヨーガの種子の獲得」と位置づけ、その獲得の最上位にジャイナ聖者への理解と帰依（namaskāra）、そして敬礼（praṇāma）とをおく。こうした姿勢は、Har のヨーガ観を決定づける三つの要素、すなわち正しき信（faith）・正しき智（knowledge）・正しき行為（conduct）を背景に成立している。[9] 特に mitrā の段階で重要な意味を持つ要素は、正しき信であり、ここではそれがジャイナ聖者への帰依・敬礼として表現されている。

ただし、mitrā はあくまで八段階にわたるヨーガ的修習の出発点であり、それは僅かな悟性（darśana）を伴うにすぎない。[10] これが実際に解脱への働きかけ、その実現という形に昇華するのは、「最後のプドガラの回転する時」（crame pudgalā-'varte）を待たねばならない。[11]

さらに Har は、このようなヨーガ的修習の出発点を具体的に再考し、YDS 25～27 を用意している。この部分を要約すれば、(1)邪想（saṃjñā）を断滅し（cf. YDS 25）、(2)真実のヨーガ行者（bhāva-yogin）の宗教的禁欲生活に奉仕（vaiyā vṛttya）し[12]（cf. YDS 26）、(3)真の結論に導かれた教戒（vidhin）によって書き示されたものを獲得すること（cf. YDS 27）、の三つである。

この内、邪想（saṃjñā）は YDS 25 の Har 自註に、ジャイナ教第五アンガ Bhagavatī VII-5 を引用し、十種に分けて説明される。アルダマガディーで書かれた術語をサンスクリットに還元しながら整理すれば以下の通りである。

(1) āhāra-sannā＝āhāra-saṃjñā　食想
(2) bhaya-sannā＝bhaya-saṃjñā　恐想
(3) mehṇa-sannā＝maithuna-saṃjñā　愛欲想
(4) pariggaha-sannā＝parigraha-saṃjñā　所有想
(5) koha-sannā＝krodha-saṃjñā　忿怒想
(6) māṇa-sannā＝māna-saṃjñā　慢心想
(7) māyā-sannā＝māyā-saṃjñā　欺瞞想
(8) lobha-sannā＝lobha-saṃjñā　貪欲想

(9) oha-sannā＝ogha-saṃjñā　一般想
(10) loga-sannā＝loka-saṃjñā　世俗想[13]

この十種、いずれも常識的な邪想の概念に準拠しているが、第五アンガを引用することにより伝統的なジャイナ教の教義に範を取る姿勢を示している。

さらに生活に密接に関連する具体的なヨーガの種子獲得のための行作が、YDS 28 に①正しい経典の書写（lekhānā）②花・衣服等による供養（pūjanā）③経典等を授ける恵施（dāna）④経典に関する説明の聴聞（śravaṇa）⑤経典の独誦（vācana）⑥経典の教えの獲得（udgraha）⑦知られたことを、そのあるべき状態において顕示（prakāśanā）すること⑧経典の独誦等の学習（svādhyāya）⑨書物を対象とする熟慮（cintanā）⑩熟慮された教えの修習（bhāvana）、の十種に数え挙げる。[14]

これらはいずれも肉体的な行為というよりは、正しき教えを学ぶこと、あるいは正しきものへの信頼を基軸としている。それは、YDS 28 に示された各々の術語の意味以上に、Har の自註が注意深く示唆するところでもある。Har のヨーガ的修習に対する基本的姿勢としてみることができよう。

Patañjali の八支ヨーガ第一支 yama に比較しても それは明瞭である。ここに示された mitrā の具体的な役割は、外的に働くべき禁戒としてあるのではなく、内面的・精神的要素の強いものとして現われている。こうした傾向は、以下に述べる第二視点 tārā、第三視点 balā にさらに明確に示されてくる。

II　niyama（勧戒）と tārā

清浄・満足・苦行・学習・主宰神への祈念とが勧戒（niyama）である。

śauca-saṅtoṣa-tapaḥ-svādhyāye-' śvara-praṇidhānāni niyamaḥ　〈YS II-32, Har ad YDS 41〉

YS による勧戒（niyama）の定義である。禁戒（yama）同様、このスートラもまた YDS 41 の Har 自註に引用される。YDS 41 は第二視点 tārā の解説の冒頭におかれた偈頌であるが、ここでも mitrā 同様 Patañjali の引用は単に形式的追随の域を出ない。

それどころか YS にみられる五つの勧戒は、第五番めの勧戒、主宰神への祈念（īśvara praṇidhāna）を除いて、おおむね Har の述べる第一視点 mitrā の範疇にあることが理解される。

(1) 清浄（śauca）に関して Vyāsa は、外的なもの（bāhya）

と内的なもの（abhyantara）を分け、[15]後者を「心の汚れを除去すること」（citta-malānām ākṣālanam）と説示している。この概念は、YDS が mitrā の解説中、「[ヨーガの種子の獲得は] このような存在の汚辱（bhāva-mala）が多量に滅する（kṣīṇa）時、人々に生起する」[16]と述べるところに一致する。もっとも注意すべきは、YDS がヨーガの種子の獲得とその効用の生起とを分別して、「最後のプドガラの回転する時、これ（存在の汚辱）の滅が生ずる。」[17]と、現実の汚辱の滅する時を後に譲っていることである。それでも、存在の汚辱の滅の前提となるヨーガの種子の獲得は mitrā にあり、それは YS に述べる niyama の清浄（śauca）と相似するとみることに問題はない。

(2)満足（saṅtoṣa）に関して Vyāsa は、「満足とは手元にあるもの以上に取ろうとしないこと」[18]と註釈し、後にスートラを改めて、「この世における愛欲の楽、及び天上界の大楽、これらは渇愛の十六分の一にも匹敵しない。」[19]と再び註解するが、ここで最も中心的に求められているものは、世俗的な渇愛（tṛṣṇā）の滅である。これはすでにみた YDS 25 の邪想（saṃjñā）の滅、すなわち Har の自註に示される食邪想（āhāra-saṃjñā）を始めとする十種の邪想の滅に相応する概念といえよう。

(3)苦行（tapas）は、YS に「苦行によって不浄（aśuddhi）が尽きるから、身体と感官との超自然力（siddhi）がある。」[20]と説明されるが、YDS 26 の前半部分は、この tapas に相当すると考えられる。

真実のヨーガ行者たる先師 [の宗教的禁欲生活への理解がある] 時、この清浄化されたものは [ヨーガの種子である]。

ācāryā-'diṣv api hy etad-viśuddhaṃ bhāva-yogiṣu

〈ab ad YDS 26〉

Har は自註において、ācārya に「宗教的禁欲生活」（tapasya）ということばを補い、清浄化される対象を「知」（citta）であるとする。[21]これは、苦行の目的を不浄（aśuddhi）の滅に定め、その結果として身体と感官との超自然力（siddhi）の獲得を説く YS を意識してのことであろう。特にカーリカー本文に表わしきれなかった部分を自註に補塡する姿勢にこそ、その意図をみてとることができよう。

(4)学習（svādhyāya）に関してはいうまでもなく、すでに紹介済みの YDS 28 に示された、十種の具体的なヨーガの種子獲得のための行作の八番め、「学習」（svādh-

yāya) が、内容的にも用語上でも完全に一致をみる。さらにつけ加えるならば、YS II-44 に対する Vyāsa の註「諸神や仙人や聖人達が、自ら学習する気質あるものにはみえてくるし、また彼の仕事に臨席する」[22]よりすれば、正しいヨーガ行者（すなわち諸神・仙人・聖人達）の教えを聞く「聴聞」(śravana) や、その教えの「獲得」(udgraha) といった YDS 28 の他の十種のヨーガの種子獲得のための行作もまた、YS の勧戒 (niyama) の一つ、「学習」(svādhyāya) に含まれていることになる。すなわち広義には、YS の述べんとする第二支、勧戒 (niyama) 中、「学習」(svādhyāya) は、Har の八種のヨーガ視点のうち、すでに第一視点 mitrā におけるヨーガの種子獲得の具体的方法を説示する YDS 28 におおむね相当しているということである。

最後の勧戒、すなわち YS II-32 における五つめの niyama、「主宰神への祈念」(īśvara-praṇidhāna) だけは、mitrā の説明に限らず、tārā にかかわる説明の文脈にも現われてこない。このことは、ジャイナ教の伝統的教義を受け継ぎ、なおかつその領域において独特の思想的展開をはかろうとする Har の個性の一つとして理解することが可能となろう。

先にも触れたように、Har はジャイナの伝統にそって人格的最高者たる絶対智者 (sarvajña; kevala) の存在を認知し、それに到る道程にヨーガの修習を位置づけている。したがって、創造・支配・恩寵を行なう主宰神 (īśvara) の発見と祈念とは、彼の指向する人格的最高者への道＝解脱には不要な要因である。彼がさかんに YS を参照しながら、なおかつその中から「主宰神への祈念」という一項を恣意的に排斥しているところにこそ、彼の思索性をみてとることができるのである。

さてこのように YS と Vyāsa の註釈に語られる勧戒 (niyama) に相当する内容が「主宰神への祈念」を除いて、おおむね第一視点 mitrā にすでに導入済みであるとするならば、もはや第二視点 tārā の記述における YS の勧戒との対照は、第一視点における禁戒 (yama) の対照以上に形式的な儀礼にすぎない。

それにも増して、恣意的に無視された第五の勧戒、「主宰神への祈念」は、その後も YDS の議題にのぼることがない。それでは、YDS の第二視点 tārā の目指すところはいったいどこにあるというのか。この点に関して tārā の解説は、ここに参照した Patañjali の niyama, Bhadanta Bhāskara の an-udvega, Bhagavaddatta

の jijñāsā といった八支ヨーガ的考察の対照概念が複雑に絡み合う記述となっており、その真に指摘するところを抽出しにくい構造になっている。

そこで後に述べる YDS の第三視点 balā、第四視点 dīprā の記述との関連において検討するならば、おおよそ次のようなことが主題として浮き上がってくる。

まず第二視点 tārā において具体的に実行されねばならないことは、

さらにまた［習熟された］能力による［ヨーガ行者への］奉仕（upacāra）は、ヨーガの［正しい］発達による結果を引き起こすものであり、ヨーガ行者達の勧戒の故に、それ（奉仕の履行）によって摂取する知恵に結びつくものである。

yathā śakty-upacāraś ca yoga-vṛddhi-phala-pradaḥ / yoginām niyamād eva tad-anugraha-dhī-yutaḥ 〈YDS 43〉

と説明される如く、「［ヨーガ行者への］奉仕（upacāra）である。自註によれば、奉仕とは「食物（grasa）等を捧げることによって［なされる］」[23]といった非常に現実的な在り方を意図しており、その背景に問われるヨーガ行者、あるいは真の教説への信（śraddhā）こそが、YDS の本意である。そこで YDS 44 は以下のように述べる。

これ（ヨーガ行者への奉仕の行為者）の獲得する別の果報は、敬信（śraddhā）に結びついている。［前にいわれた如く］利益の生起は僅かな災禍（疾病等）の滅であり、同様に［奉仕の高度な恭敬が］教化された人に認められることである。

lābhā-'ntara-phalaś cā'sya śraddhā-yukto hito-'dayaḥ / kṣudro-'padrava-hāniś ca śiṣṭa-sammata-tā tathā 〈YDS 44〉

この「敬信」（śraddhā）は奉仕（upacāra）の行為者の獲得する果報（vipāka）に結びついており、それは世俗的なものとして疾病等の滅、宗教的な側面からは、奉仕の行為者の高度な恭敬（bahumāna）を生ずる。したがって、「敬信」につながるの状態にある人々は、「世俗的な存在より生ずる恐れ」、「為さるべきことの放棄」、「非享受」、「不適切なる行為」がない。[24]これはBhagavad-gītāにみられる karma-yoga にかなり近接する思考であって、ここで YDS は、結果への執着の放棄、主智主義者に多くみられる無作による遁世的指向からの脱皮をめざし、「敬信」にもとづくヨーガ的修習の実践を導入して、「行為」そのものの純化を図っているといえるのではな

いか。

つまり彼の思索の基本にあるのは、肉体を伴う自己の発見であり、為さるべき行為を所有する人間的実在への現実的な透視である。彼は空想的な世界に人々を導き、あるいは甘美な幻想による解脱への憧憬をなさしめる働きをあえて忌避して、ヨーガの実習を説かんとするのである。

したがって tārā は、YS の如く宗教的道徳観に伴われた勧戒（niyama）を意図しているのではない。そうした道徳的義務はすでに第一視点 mitrā に完結している。ここでは、肉体を伴った人格が、その肉体を保有したままの状態において解脱への一歩を踏み出すべき原点として「敬信」（śraddhā）が語られているとみるべきであろう。そこで YDS は tārā の役割をまとめて次のように述べる。

[自己の能力を] 超えた [禅定（dhyāna）等の] 宗教的義務が、[師等において] 高度に達成される時、[人々には] 熱望に伴われた知らんとする欲望（jijñāsā）が [生ずる]。

一方、このような（恭敬を為すもの）の生来の欠陥における歎きは嫉妬（dveṣa）を離れている。

kṛtye'dhike'dhikagate jijñāsā lālasā-'nvitā / tulye nije tu vikale saṃtrāso dveṣa-varjitaḥ 〈YDS 46〉

すなわち、師等において高度に達成された禅定（dhyāna）等の宗教的義務に対して、「これはいったい如何にしてあるのか」といったような「知らんとする欲求」（jijñāsā）が生ずる。[29] ただし、この「知らんとする欲求」はあくまで結果に対する執着を離れたものでなくてはならず、tārā の位において生ずるこの欲求は、「わたしは侮辱されたものである」[30]といった嫉妬を離れた質のものとして純化されているという意味である。

tārā の位にあって YDS は、社会的な戒の実践や肉体的な作法・技法を離れて、もっと精神的な智への姿勢、それも主智的な遁世感に堕することなくあくまで肉体を伴った人間的実在への確信にもとづく実践的な智への在り方を指向し、あるいは、すでにその位に到達している聖者（guru）への敬信（śraddhā）を強調している。こうした傾向は、第三視点 balā、第四視点 dīprā にあって、さらに強固に展開している。以下に二つの視点をまとめて概観する。

III āsana（坐法）、prāṇāyāma（調息）と balā, dīprā

YS の第三支「坐法」(āsana)、第四支「調息」(prāṇāyāma) では、さらに肉体的・生理的な傾向が強化されている。

確固として安楽なるものが坐法 (āsana) である。

sthira-sukham āsanam 〈YS II-46〉

[坐法は] 緊張の緩和と [心の] 無限の集注の両者によって [得られる]。

prayatna-śaithilyā-'nanta-samāpattibhyām 〈YS II-47〉

そこでは、相対する [寒・暑等の] ものによって害されることはない。

tato dvandvā-'nabhighātaḥ 〈YS II-48〉

これ (āsana) ある時、吸息 (śvāsa) と呼息 (praśvāsa) の両者の流れを断つことが、調息 (prāṇāyāma) である。

tasmin sati śvāsa-praśvāsayor gati-vicchedaḥ prāṇāyāmaḥ 〈YS II-49〉

そこでは照智 (prakāśa) を覆うのも（識別智を覆っている業）が滅する。

tataḥ kṣīyate prakāśā-'varaṇam 〈YS II-52〉

Vyāsa の註釈も同じような傾向を示している。たとえば、坐法を解説せんとして十二に分類された蓮華坐・英雄坐・吉祥坐・卍坐・杖坐・支えによる坐・寝台坐・鷲坐・象座・駱駝座・平らな姿勢[27]・安楽座は、いずれもその作法を問うたものにすぎない。あるいは、調息 (prāṇāyāma) にしても、その目的は「照智を覆うものを滅する」こと、すなわち識別智 (vivekajñā) を妨げるものの滅であるとしても、その手段といえば、呼息 (praśvāsa) の後、息の流れを止める対外的調息と、吸息 (śvāsa) の後、息の流れを止める体内的調息によるとされるなど、[28]極めて肉体的・生理的な色彩の強いものとして教示されている。

しかるに Har の第三視点 balā、第四視点 dīprā は、これまでと同じ傾向として Patañjali を始めとする三つのヨーガ楷梯を参照しつつ、複雑な論議を展開しているとはいえ、YS に示されるような肉体的・生理的傾向は希薄である。

ただしここで参照される三つのヨーガ楷梯のうち、Bhagavaddatta のヨーガ第三楷梯「聞かんとする欲求」(śuśrūṣā) は重要な働きを持っている。すでに我々は第二

視点 tārā の考究において、「知らんとする欲求」(jijñāsā) が生ずることを指摘したが、[28] このことばもまた Bhagavaddatta のリストの第二階梯にあげられている。[29] さらに彼のリストの第四階梯には、YDS の第四視点 dīprā において重要な意味を持つ術語、「聴聞」(śravaṇa) が掲げられる。

もっとも、ここで注意すべきは、Har はすでにこの「聴聞」(śravaṇa) なる術語を第一視点 mitrā の解説中、YDS 28 にヨーガの種子獲得のための行作の第五番めとして使用している。[30] ここでもその意図するところは YDS 28 と大差はない。我々があえてこの熟語を第四視点 dīprā におけるキーワードと指摘するのは、ここでは「聴聞」(śravaṇa) を原点とし「聞学」(śruta) を介して、第四視点の最終的目標である「真実の教法」(tattva-dharma) の獲得、あるいは「真実の聖典」(tattva-śruti) の理解が願われているからである。したがってここでは教法の獲得という目的を前提として、「聴聞」(śravaṇa) は重要な術語として機能している。こうしてみると Har は、参照する三つのヨーガ階梯の内、Bhagavaddatta の考え方にかなり傾倒しているとみることもできよう。

かかる観点よりすれば、以下に引用する第三視点 balā 解説中の一偈、YDS 53 と第四視点 dīprā 解説中の一偈、YDS 61 は比喩的な表現を採りながら、内容的に重要な対を成しており、balā と dīprā の相互関係が、この二つの偈頌を基軸に理解されることになろう。

知識の水の流れに対して、これ(聞かんとする欲求)は水源に似たる正しきもの達の理解である。これ(聞かんとする欲求)なき場合、聞学は、水源なき川床に井戸を[掘る]如く無意味である。

bodhā-'mbhaḥ-srotasaś caiśā sirā-tulyā satāṃ matā/abhāve'syaḥ śrutaṃ vyartham asirā-'vani-kūpa-vat 〈YDS 53〉

刺戟のある水を捨て、甘き浄水と結びついて種が芽をふく如く、まさにそのように、真実の聖典によって人は[成長する]。

kṣārā-'mbhas-tyāgato yadvan madhuro-'daka-yogataḥ/bījaṃ prarohaṃ ādhatte tadvat tattva-śruter naraḥ 〈YDS 61〉

「知識の水の流れ」(bodhā-'mbhaḥ-srotasa) に対して、「聞かんとする欲求」(śuśrūṣā) は水源 (sirā) に喩えられる。水源なくして水の流れはなく、井戸を掘ること、すなわち「聞学」(śruta) は無益な削掘 (atat-khanana) と

なる。[31] また同種の比喩的表現によって対をなす YDS 61 の「甘き浄水」(madhuro'daka) は、「真実の聖典」(tattva-śruti) を、また「刺戟のある水」(kṣāra-'mbhas) は「世俗的な存在につながるもの」(bhava-yogin) を指示している。[32]

つまり balā の主幹となる「聞かんとする欲求」は、dīprā の「聞学」の真の在り方を決定づけるものであり、その前提をなす。両者は密接な関係存在であり、それは水の流れを生み出す水源とその水源を目指して井戸を掘る行為に喩えられる。首尾よく水の流れを得られるならば、甘き水を求めよ。甘き水とは「真実の聖典」の伝える教法 (dharma) である。この精神的な「聞かんとする欲求」の原点は、第二視点 tārā にみられた「知らんとする欲求」(jijñāsā) であることにはことばを尽くすこともない。その「知らんとする欲求」が、ヨーガの修習の過程において執着を離れ、純化した在り方として成り立たない限り、balā, dīprā に述べる「聞かんとする欲求」も「聞学」も共にその真の在り方に結果することもない。いうまでもなく最終的な「真の教法」「真の聖典」の獲得も有り得ない。

ただし注意すべきは、第二視点 tārā にあって「知らんとする欲求」(jijñāsā) とともにあった「奉仕」(upacāra) が、聖人 (guru) あるいは真実のヨーガ行者 (tattva-yogin) といった人格的完成者にむけられていたのに比して、ここで語られる「聞かんとする欲求」(śuśrūṣā)、「聞学」(śruta) の対象とするところは、聖典のもたらす真実、すなわち教法 (dharma) である。YDS 58 から 60 にかけて、そのあたりが非常に詩的な表現を借りて語られる。

呼吸 (生命) よりも尊き教法 (dharma) が、この存在 (dīprā) には疑いなく [生起する]。教法のために呼吸 (生命) を放棄することはあっても、呼吸の危険状況にあって、教法を [放棄することは] ない [からである]。

prāṇebhyo'pi gurur dharmaḥ satyām asyāṃ na saṃśayam / prāṇāṃs tyajati dharmā'rthaṃ na dharmaṃ prāṇa-saṅkaṭe 〈YDS 58〉

教法 (dharma) はただ一人の朋友であり、それは死んで後にさえ共にあるものである。しかし、その他の一切は、肉体に伴って消失する。

eka eva suhṛd dharmo mṛtam apy anuyāti yaḥ / śarīreṇa samaṃ nāśaṃ sarvam anyat tu ga-

cchati　〈YDS 59〉

斯くの如く正しい精神に満たされ、真実の聴聞（śravaṇa）に身を委ねたるものは、呼吸（生命）よりも尊き教法（dharma）に力強く到達する。

ittham sad-āśayo-'petas tattva-śravaṇa-tat-paraḥ / prāṇebhyaḥ paramaṃ dharmaṃ balād eva prapadyate　〈YDS 60〉

しかし、こうした行為が単に教法への帰依ということにのみ終始しないことは次の YDS 64 に明らかである。

尊者への献身による効能によって、阿羅漢（tīrthakṛt）の見解が理解される。[それは] 等至（samāpatti）等を経て、涅槃に確かに結びつくものである。

guru-bhakti-prabhāvena tīrthakṛd-darśanaṃ matam / samāpatty-ādibhedena nirvāṇai-'ka-nibandhanam　〈YDS 64〉

この偈頌にあっては、「知らんとする欲求」を出発点に、尊者あるいは真のヨーガ行者への「奉仕」や「献身」(bhakti) の姿勢を伴った、教法を正しく「聞かんとする欲求」が説かれている。そして教法の「聞学」を介して、阿羅漢(tīrthakṛt) の智の理解という形で結実する可能性が示唆されている。それは真実のヨーガ行者といった人格的他者、また真実の教法といった外的な真実在に執着を介入させることなく学ぶことにより、やがて自ら阿羅漢として救われてゆこうとする Har の涅槃観を表わしているとすることができよう。

まとめ

以上、概観してきたところ、Har の述べる八つのヨーガ視点は、Patañjali, Bhagavaddatta, Bhadana Bhāskara 等の語るヨーガの八階梯をおおいに参照しつつも、独自の展開を固守しているということ、第一視点に YS の yama, niyama に相当する肉体的・生理的な戒および作法の実践を包含し、第二視点からは肉体的・生理的な作法の枠を越えて、むしろ精神的・宗教的色彩の強い方向性を示しているということ、そこでは「知らんとする欲求」を出発点に、やがて自ずからなる涅槃への可能性を示唆する「阿羅漢の智」へと展開する文脈を持つということ、さらにその背景にはつねに「真実のヨーガ行者」あるいは「真実の教法」への「敬信」(śraddhā) や「献身」(bhakti) が意識されているということ、等をみた。

L. D. Institute 発行の "Sambodhi" Vol. 9 No. 1-

4, "Haribhadra's Synthesis of Yoga" と題する論文に、Shantilal M. Desai は Malvania の言説とことわったうえで、Har が仏教的な教義を背景にしながら Patañjali の形式にのってこのヨーガ八視点をあらわした、としている。その一つの証左として、Har は、仏教の慣習に倣って否定辞 (a-, an-) を伴う術語を多用している、とする。しかしながらここには、Desai が Malvania より直接聞き及んだものなのか、あるいはどこかの論文に指摘されるところなのかの記述がなく、その真意を確かめることができない。しかし仏教に限らず、Har が多聞であり多くの他学説の影響を受けていたことは否定できない。それでも彼はその多聞に溺れることなく、独自の思想性とジャイナ教固有の伝統教義を中心からはずすことなく論旨を展開させているとみることができよう。

本稿では Har のヨーガ八視点の内、前四者のみを紹介し整理したが、稿を改めて後四者についても論及する。

註

① Har の所属学派及び生存年代に関しては種々議論が為される。一般にはジャイナ教空衣派 (Digambara) の学僧 Jinabhadra (別名 Jinabhaṭa) の弟子であり、紀元八世紀に活躍した最も卓越したジャイナ論師の一人とされる。この年代考は Muni Jinavijayaji "The date of Haribhadrasūri" の見解によるが、H. Jacobi "Samarāicca Kahā" (pp. 1〜4)、金倉博士『インド精神文化の研究』(p. 311) もこの考え方を支持している。Dasgupta "History of Indian Philosophy" (Vol. 1 68n) は Har の生存年代を五世紀とするが、その他、Vidyābhūṣaṇa ("Mediaeval School of Indian Logic", p. 48) の如く、大 Har と、もう一人の Har を分け、前者を五世紀、後者を十二世紀の人物とする考えを含め、Har の生存年代、所属学派に関しては異説がある。実際、Har には八人以上の同名のジャイナ学者がいたとされ、問題をより複雑にしている。H. R. Kapadia "Anekāntajayapatākā by Haribhadra Sūri" の序文、Klatt "Specimen of a Literary Bibliographical Jaina Onomastion", Muni Kalyāṇavijaya (ed.) "Haribhadra's Dharmasaṃgrahāṇi" (Bombay, 1918) の序文も参照のこと。

② Har は解脱の因 (mokṣa hetu) としての yoga の実修を重んじ、Yogadṛṣṭisamuccaya の他 Yogabindu, Yogaviṃśika, Yogaśataka の四書を著わす。Yogaviṃśika, Yogaśataka の二書は小編である。Yogabindu はサーンキヤ・仏教など他学説との交渉を含み、あるいは yoga を三種ないし五種に分類し、ジャイナ教の 14 guṇasthāna との相対を説く等、Har の考える yoga を総合的に扱った書物となっている。本稿の主テキストとなる Yogadṛṣṭisamuccaya は、さらに個性的・具体的に yoga を考えることを主題としており、中心的課題は「ヨーガ視点」(yogadṛṣṭi) の各論的論考である。

③ cf. Yogabindu 3〜5.

Har はその解脱への道筋としてつねに 14 guṇasthāna を意識している。特に Yogabindu にはその傾向が顕著であり、彼の解脱観、あるいは解脱に向かうためのヨーガ的実修階梯をみてゆこうとすると、彼の使う術語の意味を guṇasthāna との相対の元に位置づけてゆかねばならない。

④ 拙稿「Haribhadra-sūri のヨーガ考察—Har のヨーガ八支研究ノート—」印度学仏教学研究 第三五巻第一号（通巻第七〇号）参照。

⑤ 前掲拙稿参照。

⑥ mitrāyāṃ dṛṣṭau darśanaṃ mandaṃ svalpo bodhaḥ, tṛṇā-'gni-kaṇo-'ddyotena sadṛśaḥ / yama ahiṃsā-'di-lakṣaṇaḥ icchā-'dikas-tathā yatho-'ktaṃ *ahiṃsā-'satyā-'steya-brahmacaryā-'parigrahā yamāh* / 〈Har ad YDS 21.〉

⑦ 仏教と Yogasūtra との関係については、本田恵『ヨーガ書註解—和訳と試論』（平楽寺書店）p. 17 参照。

⑧ tatrā'hiṃsā sarvathā sarvadā sarvabhūtānām anabhidrohaḥ / uttare ca yama-niyamas tan-mūlas tat-siddhi-paratayai-'va tat-pratipādanāya pratiādyante / 〈Vyāsa ad YS II-30.〉

⑨ K. K. Dixit "Yoga-bindu", Lalbai Dalpatbhai Series No. 19, Ahmedabad 1968. の Introduction 参照。

⑩ cf. YDS 21; mitrāyāṃ darśanaṃ mandaṃ yama icchā-'dikas-tathā....

⑪ cf. YDS 24; *carame pudgalā-'varte*, tathā bhavyatvapākataḥ....

「プドガラ」ということばは自体は、ジャイナ教に多く用いられるが、ここでいう「プドガラの回転」ということは釈然としない。Har の自註「それら（プドガラの回転）は、あるものの如何程なりとも、無始来の輪廻 (saṃsāra) において、かつあるべきことより引き離されたものである。」(ete hy anādau saṃsāre tathā'bhavyatvā-'kṣiptāḥ kasyacit kiyanto'pi) 〈ad YDS 22〉 よりすれば、「最後のプドガラの回転する時」とは輪廻より解脱に至る最終的な段階をいうのか。またこのことばは、YDS 35, 36 に用いられる「存在の汚辱の僅少なること」(bhāva-malā-'lpatā) と連関し、Har の輪廻観のキーワードとなっている。

⑫ YDS 26 そのものは「真実のヨーガ行者」(bhāva-yogin) たる「師等」(ācāryā'di) における「奉仕」を説くにすぎないが、自註は「師等において」とする部分を「師 (ācārya) すなわち先師 (upādhyāya) たる宗教的禁欲生活者 (tapasvin) 等においても」と補足している。またここで「真実」と訳出した bhāva なることばにも注意が必要である。自註はこの bhāva-yogin を説明して「実態としてあるだけの師ではない」(na dravyā-'cāryā-'di) とするが、この bhāva と dravya の対照はジャイナ教で用いられる、dravya-indriya と bhāva-indriya の対照に似ている。

⑬ ここでは、第九の oha-sannā を一般想、第十の loga-sannā を世俗想と訳しているが、両者の相違が明確ではない。

⑭ ここで傍線を付した術語の説明は、いずれも Har の自註に拠る。

⑮ cf. Vyāsa ad YS II-32; tatra śaucaṃ mṛj-jalā-'di-janitaṃ medhyā-'bhyavaharaṇā-'di ca bāhyam / ābhyantaraṃ citta-malānām ākṣālanam /

⑯ etad-bhāva-male kṣīṇe prabhūte jāyate nṛṇām 〈YDS 30〉.

⑰ saṃtoṣaḥ san-nihita-sādhanād adhikasyā'nupāditsā... 〈Vyāsa ad YS II-32〉.

⑱ yac ca kāma-sukhaṃ loke yac ca divyam mahat-sukham / tṛṣṇā-'kṣaya-sukhyasyai'te nā'rhataḥ ṣoḍaśaṃ kalām 〈Vyāsa ad YS II-42〉.

⑲ kāye-'ndriya-siddhir aśuddhi-kṣayāt tapasaḥ 〈YS II-43〉.

⑳ 註⑲参照。

㉑ devā ṛṣayaḥ siddhaś ca svādhyāya-śīlasya darśanaṃ gacchanti kārye cā'sya vartantas iti 〈Vyāsa ad YS II-44〉.

㉒ cf. Har ad YDS 43; upacāraś ca grāsā-'di-sampādanena yatho'kta-yogiṣv iti.

㉓ cf. YDS 45; bhayaṃ nā'tīva bhavajaṃ kṛtya-hānir na co'cite / tathā nā'bhogato 'py-uccair na cā'py-anucita-kriyā //

㉔ 「知らんとする欲求」(jijñāsā) は、Bhagavaddatta のヨーガ階梯にあって、第11位に用いられる術語である。(前掲拙稿参照) ここで、Har 自身は註において「知らんとする欲求 [すなわち] これはいったい如何にしてあるのか、ということに対する高度な願望に結びついたもの、[すなわち] 願望に伴われたるものが [生ずる]」(…jijñāsā-'sya katham etad evam iti lā-lasā'nvitā abhilāṣā-'tireka-yuktā...)、と説明することとなる。

㉕ cf. Har ad YDS 46; この註において Har は、ここにみる「わたしは侮辱されたものである」(hā virādhako-'ham iti) といったような「驚愕」(saṃtrāsa) が「憎悪を離れている」(dveṣa-varjitaḥ) とされる理由を「卓越せるものに関係する見解たる *sāmarthyoga* の故に」とするが、この sāmarthyoga なる術語は、すでに YDS 3〜10 にかけて icchāyoga, śāstrayoga とともに総括的なヨーガの三段階の最上位に当てられている。(前掲拙稿参照)

㉖ cf. Vyāsa ad YS II-46.

㉗ cf. Vyāsa ad YS II-50; yatra praśvāsa-pūrvako gaty-abhāvaḥ sa bāhyaḥ / yatra śvāsa-pūrvako gaty-abhāvaḥ sa śrāmyantaraḥ /

㉘ 本文 p. 53 下段 *l.* 5

㉙ 前掲拙稿参照。

㉚ 本文 p. 49 上段 *l.* 9

㉛ cf. Har ad YDS 53.

㉜ cf. YDS 62; 「ここでは、一切の世俗的存在につながるものは、刺戟性のある水に似ていると考えられる。一方、真実の聴聞は甘き水につながるものに等しい。」(kṣārā-'mbhas-tulya iha ca bhava-yogo 'khilo mataḥ / madhuro-'daka-yogena samā tattva śrutis tathā //)